2007 年度 修了

# 世阿弥の習道論に見る教育

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
福井　良寛

「教育論」とは、一人ひとりの教育者が持っている、教育に対する信念や哲学を体系的にまとめたものである。ゆえに「教育論」は教育者の数だけ存在する。それは、書物として形に残っているものもあれば、残っていないものもある。多くの人々に賛同されるものもあれば、されないものもある。時や場所を越えて支持されるものもあれば、されないものもある。一つだけいえることは、教育者であるならば、自覚の有無には関係なく、己の信ずる「教育論」を持っているということである。

本論文は、能における偉大な教育者である世阿弥の稽古・習道論を考察し、それを「教育論」として読み直すことを目的とする。能において能楽者は、生まれつき持っている「幽玄」を、稽古を通して大事に育て、舞台の上でその「幽玄」を表現する。それを世阿弥は、種をまいて水をやり、花を咲かせるまで大事に育てるという行為に例える。能や芸術で「幽玄」と呼ばれるものを、仮に「魂」の美しさと呼ぶことにするならば、教育者は子どもの「魂」の美しさを意識し、守り育て、それがいつか花咲くような工夫を凝らさなければならないと言えよう。

第一章では世阿弥の考える稽古・習道の全体像を見るために『風姿花伝』の「第一年来稽古条々」、および『九位』を考察する。

第二章では世阿弥の習道の道の中でも終盤あたりに位置する、至上の芸境について考察する。ここでは至上の芸境でも特に「幽玄」という言葉と「妙」という言葉に焦点をおく。「幽玄」を考察する際には『花鏡』の「幽玄之入堺事」の段と『至花道』の「二曲三体」の段を、「妙」を考察する際には『花鏡』の「妙所之事」の段と『至花道』の「闌位事」の段、『拾玉得花』の「安き位」についての問いの部分、『拾玉得花』の「面白」についての問いの部分を取り上げる。さらに幽玄と妙の関係を考えるために『遊学習道風見』の論語云、「苗而不秀者有（なへにしてひいでざるものあり）、秀而不実者有（ひいでてみのらざるものあり）」と心経に云、「色即是空、々即是色」の部分を取り上げる。

そして最後の第三章では、西平直氏の世阿弥に関する論考を頼りにしつつ、至上の芸境に至る道を、能の舞台から離れた世界で考える、つまり世阿弥の習道論を教育論として読み直す試みである。

世阿弥の習道を続けた能楽者が舞台の上で「幽玄」を表現することと同じように、「魂」の美しさを磨耗することなく育った子どもは、社会の中で光を放つ。そして自分自身だけでなく周囲の人々をも照らし、社会をほんの少しだけ明るくするのである。